

実践・活動報告

さくらサイエンスプランによる国立モンゴル医科大学看護学部 とパーツ大学公衆衛生学部（東ティモール）の学生の招へい 「根拠に基づいた健康的なコミュニティづくり」

SAKURA Exchange Program in Science from Mongolian National University of Medical
Sciences and Paz University (Timor-Leste) to Nagoya City University:
“Evidence based healthy community development”

山口 知香枝¹⁾ 金子 典代¹⁾ 脇本 寛子¹⁾
中 神 克之¹⁾ 樋口 倫代¹⁾

キーワード：モンゴル，東ティモール，国際交流，根拠に基づく実践

Key words : Mongolia, Timor-Leste, International exchange, Evidence-based practice

I. 序 論

名古屋市立大学では、さくらサイエンスプランにより、国立モンゴル医科大学（モンゴル）とパーツ大学（東ティモール）の学生と教員を招へいし、2018年10月21日から10月28日の日程で8日間の研修を行った。

名古屋市立大学看護学部では2012年度より、大学間交流拠点校であるハルリム大学医学部看護学科との交換研修を行ってきたが、もうひとつ新たな研修プログラムを立ち上げることを名古屋市立大学国際化基本方針の部局別プランの中に掲げている。そこで、2015年から大学間交流校となっていた国立モンゴル医科大学と、2018年に看護学部が中心となって大学間交流協定を結んだパーツ大学（東ティモール）にターゲットを絞り、準備を進めてきた。

そのような中、「優秀なアジア地域の青少年が日本を短期に訪問し、未来を担うアジア地域と日本の青少年が科学技術の分野で交流を深めることを目指す」という国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」

（さくらサイエンスプラン）は今回の招へいの目的に合致すると考え「根拠に基づいた健康的なコミュニティづくり」をテーマとしてJSTに交流計画を申請し、採択された。本稿では、プログラムの趣旨及び内容と実績について報告する。

II. テーマの概要

このプログラムは、「根拠に基づいた健康的なコミュニティづくり」をテーマとし、健康のための多様な資源と、保健、医療、介護、福祉に従事する専門家の役割を学ぶことが目的である。

日本における地域包括ケアシステムは、人々が可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを続けることができるような支援・サービス提供体制である。そして、誰もが支え合う社会の実現のためには、すべての人が世代や背景を問わず、安心して暮らし続けられるまちづくり（全世代・全対象型地域包括支援）が必要であると言われている。日本は、第二次世界大戦後の最貧国であった状況から、短期間の間に世界に誇る先駆的な保健・医療システムを構築してきた。一方で、急速に進む少子高齢化社会

受付日：2019年1月11日 受理日：2019年2月4日

¹⁾名古屋市立大学大学院看護学研究科

では、医療費の増大や介護のためのマンパワー不足、ひいては労働力減少による日本の経済成長を鈍化させるなどといった様々な複合的な問題を抱えている。

今回招へいしたモンゴルと東ティモールは、母子を取り巻く衛生環境の改善や保健・医療・福祉システムの確立、人口動態制度の充実などといった、健康的に生活するための社会の仕組みづくりが喫緊の課題である。日本とは直面する課題は異なるが、日本の先駆的なシステムとその中における問題を学ぶことで、自国の看護や医療、保健を振り返り学びを生かすことができる。また、将来それぞれの国で、保健医療のために貢献する参加者らが、日本がどのように健康的な社会を達成したかを学ぶことが期待できると考えた。

Ⅲ. プログラムの趣旨

プログラムを通して、参加者が日本のユニバーサル・ケアへの包括的で多様なアプローチを理解する機会を提供した。プログラムの主要部分は次の3つのコンポーネント、すなわち、1) 根拠に基づく保健活動と政策、2) 地域社会における公衆衛生活動、3) コミュニティベースの医療、で構成された。具体的なプログラムは以下の通りである。

1. 名古屋市衛生研究所の研修を通して、健康に関わる情報・データ収集と解析の重要性、またそれがどのように施策へ反映されているかについて学ぶ。
2. 訪問看護、訪問診療、地域包括支援センターなどの研修を通して、地域住民が住み慣れた地域で自分らしく生活できるような支援・サービスがどのように提供されているかを学ぶ。
3. 名古屋市保健所の研修を通して、様々なライフステージあるいは様々な健康レベルにある地域住民を対象とした地域保健活動の実際とその評価について学ぶ。

Ⅳ. 活動内容

1. 名古屋市衛生研究所

名古屋市衛生研究所は、市民の健康を守るための科学的拠点として、感染症対策・食品・生活環境などの分野で検査業務や調査研究を行っている。今回

は、母子保健、感染症発生動向調査、サーベランスデータに関する講義を受け、感染症に関する討論を行った。研修参加者より、日本においてサーベランスシステムの報告意識が高い理由について質問があり、法律で報告が義務付けられていることが要因として大きいことが説明された。さらに、微生物部（細菌、ウイルス）、食品部、生活環境部の各部署を見学した。研修生にとっては、法律に基づく検査や研究の実際を見学する貴重な機会であった。質疑応答では、東ティモールでは、ゴミ問題、食品問題、下痢、結核、HIVに関する課題が、モンゴルでは、大気汚染に関する課題があり、それぞれの解決策について積極的に意見を求めている。「最も重要なことは、状況をデータで示し、エビデンスに基づいて対応することである。」という説明に、参加者は非常に感銘を受けていた。

2. 訪問看護、在宅診療などの研修

愛知国際病院は日進市にある私立病院で、機能種別では一般病院1（主として、日常生活圏域等の比較的狭い地域において地域医療を支える中小規模病院）に分類されており、地域住民が自宅・地域で過ごすことを応援することを掲げている。今回のプログラムでは、特に「コミュニティベースの保健医療を理解する」部分を訪問目的とした。

午前中は、看護部長の司会で、病院長による法人紹介からはじまり、一般病棟、外来、ホスピス、地域医療連携室、訪問看護ステーション、老人保健施設の6部署の医師もしくは師長の説明を受け、質疑応答を行った。参加者らは一般病棟患者の平均年齢が80歳代であることに驚き、また、日常生活が自分でできない方も多いということがはじめは理解できない人もいた。医師が説明した「dementia」についての質問や、予後が短いと診断された人が亡くなるまで病院に入院し続けていることへ疑問もあった。

病院食の昼食を挟んで、午後からは、まず2グループに分かれて紹介された部署を周った。その後は、さらに小グループに分かれ、ホスピス、老人保健施設での活動参加、訪問診療または訪問看護の同行、高齢者疑似体験、病棟でフットケア見学、とろみ食試食などの実習を行った。

最後の振り返りでは、医師、看護師をはじめ多職種が協力して包括的なケアを行っていることや、ボランティアが各所で活躍していることなどが印象に残った点として挙げた。同時に、高齢者が一人暮らしをしていることや病院で死ななくてはならないのは悲しい、という意見も聞かれた。築36年の病院をみな口々に「きれい」「整っている」ということをはじめ、受け入れ先の職員にとっては、想定外の感想や質問も多かったようである。「環境の違いにびっくりはしたが、いい刺激になり、また学生さんたちのパワーや積極性にも感動した。」というコメントをいただいた。

3. 名古屋市中保健センター

名古屋市中保健センターの4か月乳幼児健康診査に参加した。日本、名古屋市における母子保健対策の現状、乳幼児健診の意味づけ、現在日本で問題となっている虐待をはじめとする母子保健の課題について説明があると、東ティモールの参加者からは、健診の高い参加率や健診の案内を個別に全家庭に送るシステムなどに大変感銘を受けていた。一方で、なぜ日本ではみな子供を産もうとしないのか、なぜ虐待の件数が増えているのか、など質問が見られた。モンゴルチームからはシングルマザーや孤立しがちな母親への名古屋市での支援の実際について、質問が出された。モンゴルもウランバートルでは都市化が急速に進み、シングルマザーの孤立の問題も出てきている。日本はハイリスクと思われる家庭については、保健師が把握し、地域の民生委員とも協力し、定期的にフォローやサポートを行っていることが説明された。モンゴルにも、看護職や地域ボランティアの連携ができる仕組みづくりが必要であると述べていた。

4. 成果報告会と修了証授与式

今回の招へいの一部は名古屋市立大学の平成30年度研究奨励費（国際交流推進活動）を受けた人文社会学部と経済学部との共同研究「地域づくりと健康づくりに着目した東ティモール・パーツ大学との学際的交流の構築」によるものである。パーツ大学との大学間交流協定においては、複数の学部との交流希望が先方よりあり、協定締結の準備段階から人

文社会学部と経済学部でアジアとの交流実績のある教員にも協力を要請してきた。そのような理由で、人文社会学部、経済学部の教員、学生も参加する合同開催として実施した。参加者は、総勢36名であった。研修参加者は2チームに分かれ、10月22・23日の前半のプログラム、10月24・25日の後半のプログラムで活動内容と成果、学び、感想などを発表した。衛生研究所の視察では、日本では食品の衛生管理や感染症対策が徹底されていることに感銘を受けたことが報告された。また愛知国際病院の見学では、職員間のカンファレンスが丁寧に行われており、チーム医療が進んでいることを感じたとの意見がでた。さらに、ボランティアが主体的に自身の能力を発揮して素晴らしい仕事をされており、ぜひ見習いたいとの意見がだされた。質疑応答では、日本に来て感じた日本の欠点や母国の強みについて質問がなされた。東ティモールの学生からは、日本の欠点は少子高齢化が進んでおり核家族化が進んでいることや、母国の強みは家族の単位が大きく健康問題があっても高齢になっても孤立することはほとんどなく何かあってもすぐに人的サポートが受けられることなどの意見が挙げられていた。

成果報告会終了後、修了証の授与式を行った。修了証授与式では、各国研修参加者へ修了証と記念品の授与が行われた。

修了証授与式終了後、研修参加者と名古屋市立大学教職員・学生らによる懇親会を行った。懇親会では、食文化や自国の文化等について活発な意見交換がなされ、それぞれに親交を深めることができた。

5. その他の活動

その他の活動として、若宮大通公園にてNGOささしまサポートセンターの行う野宿者支援を見学した。東ティモールとモンゴルの研修参加者の他に本学学生5名と教員2名も参加した。主に食事配給や無料医療相談場面を見学した。また支援者から、日本人野宿者の暮らし方やサポート体制等について説明を受けた。参加者らは日本の野宿者がほとんどで男性であることに驚いていた。東ティモールとモンゴルでは野宿者の多くは女性や子どもであり、このような違いやサポート体制の比較について質問をしていた。東ティモールの学生は、自国にこのようなサ

ポートがないため、今後自国に導入したいと意見を述べていた。

また、モンゴルおよび東ティモールの文化や看護、医療福祉について各国の学生が発表し、本学の学部生と意見交換したり、大学病院の見学、本学における公衆衛生学の位置付けを学ぶことを目的に医学部公衆衛生学教室の訪問なども行なった。

V. 今後の展望

このプログラムを通して、各国の参加者が日本における健康的なコミュニティの構築過程や、それぞれの場における専門職の役割、評価方法について学ぶことができた。特に高齢化が進む日本における終末期のあり方やボランティア活動の活発さとそこでの心のこもったケアなどに関心が寄せられた。今後もプログラムを継続し、学びを深め、再び日本に訪れたいという希望もあった。大学院への留学生受け入れも含め、今後もプログラムを継続していく。

また、本稿で詳述した研修内容以外に、招へい学生による国と大学の紹介、招へい教員による研究紹介、交流会、学部講義の中で行われたグループディスカッション、受入大学（名古屋市立大学）学生ボランティアによる市内見学などのサポートなどさまざまな交流活動も実施した。これらは、名古屋市立大学看護学部生にとっても国際交流経験の機会となると同時に、開発途上国の現状など健康と社会や世界の間接関係を学ぶ機会にもなった。

双方向の多角的視野を持った学びの機会として発展させていくことが望ましく、また、グローバル化時代に求められる内容であると考えている。

VI. 利益相反

論文内容に関し開示すべき利益相反の事項はない。

VII. 謝 辞

本プログラムは、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）による「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」（さくらサイエンスプラン）、名古屋市立大学特別研究奨励費および名古屋市立大学留学生後援会の支援を受けて実施した。なお、本稿の一部は、活動報告書として JST に提出したものである。

本プログラムを遂行するにあたり、名古屋市衛生研究所の皆様、愛知国際病院の皆様、名古屋市保健所および名古屋市中保健センターの皆様には、大変お世話になりました。このためにご準備いただきました資料や英語での説明、質問への丁寧な対応など、初めて来日する学生にも分かりやすくご対応くださり、心より感謝申し上げます。

また、ご協力いただきました、非営利活動法人さしまサポートセンターの皆様、名古屋市立大学病院の皆様、名古屋市立大学大学院医学研究科公衆衛生学 鈴木貞夫教授、名古屋市立大学国際交流センターセンター長・名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 横山清子教授、名古屋市立大学看護学部教職員の皆様に深く御礼申し上げます。



名古屋市衛生研究所でお世話になった先生方と記念撮影



高齢者体験の様子



フットケアの見学

さくらサイエンスプランによる国立モンゴル医科大学看護学部とパーツ大学公衆衛生学部（東ティモール）の学生の招へい
「根拠に基づいた健康的なコミュニティづくり」



研修参加者とセンター職員との記念写真



さくらサイエンスプラン修了証授与式後の記念撮影